

『教行信証』の構成——各巻の位置について——

廣 瀬 惺

「『教行信証』の構成——各巻の位置について——」というテーマを出させていただきました。この二年間ほど、『教行信証』をいただきます場合に、各巻を全体の中でどういただいていったらよいのだろうか、『教行信証』全体の中でそれぞれの巻をどう領解していったらよいのだろうかということが、自分の中でずっと問題になり続けているということがあるわけでございます。それは、単に興味本位ということではございません。『教行信証』が真宗の世界を明らかになさって下さる書であることは申し上げるまでもないわけですが、そうしますと、六巻それぞれが、どのような位置にあるのかということが問題になるわけでございます。そのことが、私自身に真宗が明らかにすることでもあるわけです。こうでもあろうか、ああでもあろうかということ、領解したことが矛盾を孕んでおったり、あるいはまた親鸞聖人の他のものを読ませていただくと、領解したことが否定をされたりいたしました。そういう紆余曲折を経ながら、一体どう六巻を受けとめればよいのかを問題にしてまいりました。そのことが、私において真宗を明らかにすることになっていくわけにして、そういう私なりの模索というのでしょうか、一応の私なりの決着を、決着はつかないわけだけども一応の自分なりにおぼろげながら思っておりますことを一つまとめ、自分なりに発表させていたかどうかということ

で、こういうテーマを出させていただいたわけでございます。

お手許に、発表のレジュメというわけではありませんけれども、便宜上、お聞きいただく上での資料を配らせていただきます。

*

資料の最初に、私が尋ねております中で、基礎にあるものというのでしょうか、尋ねる中で基本に置いておりますものというところで、先学の見解、領解を挙げさせていただきました。これらは、私自身が六巻全体を思い巡らしております時に、常にどこか念頭にあるものがございます。

まず一つが、『六要鈔』の、『教行信証』を序分・正宗分・流通分という三分科に分けられての、仏道の書としての確認でございます。それは、私たちの『教行信証』に対しますかかわりを規定している。『教行信証』は、どこまでも仏道の書なのだということ、こちらが宗教的な要求においてかかわるといふことを、我々に示しておりますものが、この『六要鈔』の序分・正宗分・流通分という了解でございます。単なる知的関心ではなくて、私どもが自らを課題とし、その課題を通して新たな世界に生まれていく。そういう一つの宗教的な関心において『教行信証』は学ばれるものだという事です。一番基本的なところで私自身に学びを示して下さっているものが『六要鈔』ということ、そのことをまず第一番目に挙げてあるわけでございます。

それからもう一つが、曾我先生の、伝承の巻・己証の巻という見解です。ご存じの通り、『教行信証』を「教」・「行」二巻と、「信巻」以降とを二分なさいます、伝承の巻・己証の巻という教えを下さっているわけでございます。この曾我先生のご指摘を通して、端的に申し上げさせていただきますと、浄土仏教というか、『教行信証』の世界でありますけれど、それは単なる救済の教えではないのだ。そうではなくして、願に生きるという生活を我々の上に開いてくる、

そしてさらに言えば、その本願を通して仏の確証を得るといふ、そういう道が真宗であるということ、曾我先生が伝承の巻・己証の巻というかたちで、『教行信証』を二つに分けてお示し下さったとただかれることであります。特に、己証の巻としてお示し下さっているところには、我々の上に生活を開いてくる、そして私たちの上に仏のさとりと申しますか、それを我々が自覚的に得ていく。そういう仏道を明らかにしておるものが真宗であり、『教行信証』であると。そういうことを、私は曾我先生の伝承の巻・己証の巻というお示しから、いただいているわけでございます。

そしてもうお一方、金子大栄先生は、これもご存じの通り、二部作というかたちで、「教巻」、「行巻」、「信巻」、「証巻」を第一部となさって、それから、後の「真仏土巻」、「化身土巻」を第二部と。そういう、金子先生の二部作ということですね。そして金子先生の場合は、先生ご自身の、その時々の問題意識によりまして、二部作ということは変わりないわけですけれども、そこにたとえば、回向篇・撰化篇とか、あるいは絶対真宗・相對真宗とか、さらには正説・補説とか、そういうお示しを下さっているわけです。しかし、基本的には、前四巻と、「真仏土」、「化身土」の二巻という二部作で、『教行信証』をいただいでいくといういただき方を教えて下さっているわけでございます。

これから、私なりの各巻の意味と申しますか、位置と申しますか、それを申し上げてまいります。基本にこのお三方のご見解をどこかに置きながら、私なりにどういただいでいけばよいのだろうか、というかたちでの発表内容ということになるかと、自分なりに思っているわけでございます。それでは、巻の順に沿いながら、発表させていただきますと思います。

*

資料の「2」「教巻」でございますけれども、それにつきましては冒頭に、「能詮の教と所詮の法」と、こう書かしていただきました。「教巻」は申し上げるまでもなく、真実教を決定なさっておられる。『大無量寿経』が真実教であると、

決定なさっておられる。そしてその教というのが何かと言えば、能詮だと。詮あらわすものです。だから「教卷」は詮あらわすもの。それに対して、後の五卷は所詮の法だと。詮あらわされるものです。ですから「教卷」は、『教行信証』で申しますならば後の五卷を詮あらわすもの。それに対して、後の五卷は「教卷」が詮あらわしておるもの。そういう関係になろうかと思うわけであります。それで、そのことは一体どういふことか。詮あらわすものと詮あらわされるもの。「教卷」は後の五卷を詮あらわし、後の五卷は「教卷」に詮あらわされるという、一体そのことはどういふことなのか。このことにつきましては、一番最後に、一言だけになろうかと思えますけど、触れさせていただくことにしまして、ここでは一応、詮あらわすものと詮あらわされるものという、そういうことでとりあえずは収めておきたいと思えます。最後に後ほど、もう一言、そのことはどういふことなのかについては、申し上げさせていただきますと思うわけでございます。

*

続きまして、資料「3」「行卷」でございます。「行卷」は、これは「行卷」を読んでいけばわかりますが、行とは何かということ、概念的に説明してある卷ではないわけでございます。「行卷」そのものをいただいていけば、そういう視点では読めないわけです。行とは何かということを概念的に、もし「行卷」から知ろうと思えば、納得できるかたちでは、「行卷」をいただきたい、いけません。それで、私は「行卷」をいただいてまいります一つの視点というのでしょうか、一体「行卷」とはどういう巻かということをお願いいたします。「化身土卷」の文でございます。読まさせていただきます。

「横超」とは、本願を憶念して自力の心を離るる、これを「横超他力」と名づくるなり。これすなわち専の中の専、頓

の中の頓、真の中の真、乗の中の一乗なり、これすなわち真宗なり。

（『真宗聖典』三四一―三四二頁）

そして、

すでに「真実行」の中に頓し畢りぬ。

（『真宗聖典』三四二頁）

と。こういう言葉で聖人が、「化身土巻」におきまして、真宗を「行巻」に頓し畢っておると。真宗は「行巻」で完結しておるのだと。このようにお述べになられているわけでございます。それは一体どういうことか。頓し畢っておるといふ意味はどういう意味かを私なりに述べさせていただきますと、行というのは「南無阿弥陀仏」、称名念仏でありますけれども、それを、いわゆる概念としてこういうことであるということではなくして、文字通り人々によって称せられ続けしてきた、そのことが「行巻」には表されておるのだと。そういう意味において頓し畢っておるんだと。そのように私はこの言葉を受け止めるわけでございます。

行を説明しておるわけではなくして、「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称せられ、伝承されてきた、その念仏を、七高僧の伝統として表してあるわけです。ですからその辺は、私は使いたくても、もう一つ表現がきちんなくて使えない言葉なのですけれども、曾我先生が、現実に対して「現行」という言葉をお使いになる。そういう意味で、「行巻」は、言葉として十分自身身納得できないかたちで使わせていただくとするれば、「真宗の現行」が「行巻」であろうと。「現行する真宗」と言った方がよいかも知れませんが。念仏を、もしくは行を説明しているわけではなくして、文字通り称えられ続けてきた、その念仏が七高僧の伝統として表されておるのが「行巻」でございます。ですから我々の理解できるような巻ではないわけです。繰り返し繰り返し拝読することを通して、我々が念仏者になっていくような、我々か

ら言えば、そういう巻として、私は「すでに『真実行』の中に顕し畢りぬ」という、そのお言葉を領解するわけでございます。

それで若干、そのことを示しておりますご注文といたしまして、挙げさせていただきますなら、その次の二番目ですね。これは「行巻」の冒頭でございますけれど、

謹んで往相の回向を案ずるに、大行あり、大信あり。

(『真宗聖典』一五七頁)

これは、生きた念仏というのは、信を離れた念仏はないわけです。「大行あり、大信あり」。行は当然、信と不離。生きた念仏はそうでございます。両方の面から、そのように言えるわけです。一つには、念仏は、当然信の表現でございます。そしてさらに、もう一つは、その念仏は信の人を生み出していく念仏。それが生きた念仏でございます。よう。「行巻」は、生きた念仏が表現されている巻であります。行は信を離れてはあり得ない。信の表現でありましょうし、また、信の表現としての念仏は、新たに信の人を生み出していく念仏でございます。「大行あり、大信あり」と冒頭に書かれているお心というのは、そういうことだろうと思うのです。ですからそのことは、「行巻」のご引文の中に入っておりますと、行と信が波打つように、行を表す文と信を表す文が波打つように引かれていっております。

たとえば、『聖典』をお持ちでしたら、最初からそうでございます。經典のところだけ見ましても、一五八頁の科文ナンバー七番の文、これは行でございます。そして次の「また言わく」というのは、信でございます。そういうかたちで、竜樹菩薩の文をはじめとしまして、七高僧の文にしましても、細かく拝読していきますと、そういうように行信というものが交互に、波打つが如くに、親鸞聖人は「行巻」にお引きになっておられる。このように申し上げることができらるうと思うわけです。

そしてさらに申しますと、当然、その生きた念仏には信も証も具している。しかしここでは、『教行信証』は教相を明瞭にするということがございますから、冒頭に「往相の回向について行信証あり」などと書きましたら、教相が混乱をきたしますから、往生の因としての行信をとりあえず挙げてございますけれども、しかしその引文にしましても、その中に当然証が含まれておるわけでございます。教行信証を具備しておるものが生きた念仏、「南無阿弥陀仏」という一言でございます。引文の中には当然、証も含まれるかたちで念仏が表されておるわけでありませう。また、私釈におきましても、そうでございます。

私釈の中で、特に特徴的な親鸞聖人のご文を挙げさせていただきましたのが、この「3」の③と④でございます。読ませていただきますと、三番目③の、「行巻」の親鸞聖人のご文ですけれども、

しかれば大悲の願船に乗じて光明の広海に浮かびぬれば、至徳の風静に衆禍の波転ず。すなわち無明の闇を破し、速やかに無量光明土に到りて大般涅槃を証す、普賢の徳に遵うなり。知るべし、と。
（『真宗聖典』一九二頁）

ここには、浄土も、還相回向も含んで、親鸞聖人は「行巻」に私釈をなさっておられるわけでございます。そしてさらに、その次の④のご文は、どこからを「正信偈」の「偈前の文」とするかは問題でございますけれども、一応一般に「偈前の文」と言われておりますご注文でございます。

おおよそ誓願について、真実の行信あり、また方便の行信あり。その真実の行願は、諸仏称名の願なり。その真実の信願は、至心信楽の願なり。これすなわち選択本願の行信なり。その機は、すなわち一切善悪大小凡愚なり。往生は、すなわち難思議往生なり。仏土は、すなわち報仏報土なり。

（『真宗聖典』二〇三頁）

最初のところに「方便の行信あり」ということで、もうすでにそこに「化身土巻」まで含むかたちで、「行巻」の「正信偈」の「偈前の文」は記されていますし、またそうでありますがゆえに、「行巻」の最後に親鸞聖人は、真宗全体を讃嘆なさる「正信偈」をお置きになっておられるというふう々に申し上げてよろしいんじゃないでしょうか。

そういうかたちで「行巻」というのは、生半可な言葉で表現させていただけば、先ほど申しました「現行している真宗」です。ですから、人々において「南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」と称えられてきたそのこと、それが表されており、また「行巻」であるというふうには、私は全体の中で、全体と申しますのは、『教行信証』六巻の中で、領解をいたしておるわけでございます。

そしてもう一言「行巻」につきまして、補足的に申し上げさせていただきますと、特に、行というのは解釈をしてはならないものだろうと思うのです。我々が出遇い、そこから仏道の歩みを始めていくものがございます。そして、讃嘆はできませんけれども、それを解釈する時に、真宗は真宗でなくなっていくものが行だろうと。そのことを曾我先生のお言葉で申しますと、「初めに行あり」というお示しがございます。それは、一面そういうことを意味しておると申し上げてよいのではないのでしょうか。念仏は我々が出遇うものであり、出遇うことを通して、そこから真宗の学びを始めていくものである。念仏を概念的に捉えようとするれば、もう真宗を逸脱していくという、それほどのものが行だろうと。だから親鸞聖人は、行はそういうかたちで、「現行する真宗」というか、人々に称えられてきたこととして表しておられる。そういうことでしか表し得ないものが、私は行だと思っております。そのことを、親鸞聖人の「行巻」のお言葉で申しますならば、「初めに行あり」ということにつきまして、「3」の⑤に、

発願回向というのは、如来すでに発願して、衆生の行を回施したまうの心なり。

（『真宗聖典』一七七―一七八頁）

とございます。「すでに発願して」と。すべてに先立ってということでありましょう。何事にも先立っている、まずそこから始まると。そこから始まることとして、如来において回向されているのが念仏だと、そのように領解をするわけでございます。それからさらに、そのことを補足する意味で「総序」でございますけれども、

これすなわち権化の仁、斉しく苦悩の群萌を救済し、世雄の悲、正しく逆謗闡提を恵まんと欲す。かるがゆえに知りぬ。円融至徳の嘉号は、悪を転じて徳となす正智

（『真宗聖典』一四九頁）

とあります。「かるがゆえに知りぬ」とございますように、これは、歴史的な事実をもってこのことが知られるのであって、何らかの説明によって知られるわけではないということでありましょう。それが、念仏は出遇うものだとということの意味でございます。ですから念仏というのは、説明においては出遇えないのですね。念仏は我々が出遇うものであって、そこから始まるものである。

そしてこのことは、今お配りしました資料には挙げておりませんが、今一つ注意させられますのが、『阿弥陀経』です。『聖典』お持ちの方は、お開きいただければと思います。一二九頁でございます。仏陀釈尊が、もしは一日から、もしは七日まで、念仏を勧められるわけですが、そのことについて、一二九頁最後の行に、ここは非常に大事なご文でございますけれども、こういうふうになんか仰っておられるわけです。

舍利弗、我この利を見るがゆえに、この言を説く。

（『真宗聖典』一二九頁）

念仏について、このような利益が、現に歴史的に証されてきておる、と。だから私は念仏を勧めるのだと。そういう

かたちで、『阿弥陀経』におきましても、「この利を見るがゆえに」と言うのです。仏陀におきましても、その事実をもつて勧められる。そういうことです。行を表すというのは、我々においては、概念として説明することは許されない。讚嘆、表すとすれば讚嘆でございましょう。そして我々においては、そのことにおいて、そこから真宗の学びの歩みを始めていける。そういうものが、行ということとございまして、私は、「行巻」というのは、どこまでも称えられ続けてきた念仏が、そのこととして表されておる巻が、「行巻」であると。だから、真宗全体がそこに顕されておるんだと。「顕し畢りぬ」だと。このように領解をいたしておるようなこととございます。

*

そうしますと、そのことを踏まえて、それでは、後の「信」、「証」、「真仏土」、「化身土」の各巻はどうなっていくのかということとございますけれど、そのことにつきまして、金子大栄先生が次のようなご指摘を下さっているわけです。このご指摘をいただいて、領解をいたしておるわけでございます。金子先生はこう仰っておられます。

「信巻」已下の諸篇は、「行巻」において直接に心証せられしものを分析するのである。

（『金子大栄著作集 第七巻』二二頁）

こういうお言葉で、「行巻」と「信巻」以降の内容というものをお示し下さっているわけです。ですから、「行巻」に含まれている信・証・真仏土・化身土という内容を、「分析」と仰ってますけれども、さらに言えば、「別して」というのでしょうか、開いて明らかになさっておられる。ですから、もし「行巻」にそのことが含まれておらなければ、「信巻」以降は虚妄なるものでありましょう。ですから金子先生は、「行巻」において直接に心証せられしものを分析した巻

が、「信巻」以降だというご指摘を下さっている。このご指摘を、私は、一体「信巻」以降はどういう巻かということをしていただく上で、さらには『教行信証』全体をいただく上で、大事なご指摘であるというように受け止めておるわけでございます。

そうしますと、「行巻」が大きな柱でございます。そこから「信」、「証」、「真仏土」、「化身土」を開くというかたちで、『教行信証』は明らかになさっていらっしゃいます。

それでは「信巻」というのはどういう巻か、ということでありませうけれど、当然「行巻」に、金子先生のお言葉で言えば「心証されている」、事実として含まれている信を明らかにしておられるということでございますけれども、しかしただ単にそういうことではないのでしよう。

「信巻」に置かれています、いわゆる「別序」を、私は、まずは「信巻」の序として、明瞭にいただいていかないとならないと受け止めておるわけです。つまり「信巻」を著されるお心を表しておられる、もしくは記しておられるのが「別序」でございます。親鸞聖人は、明瞭に「顕浄土真实信文類序」と、こうお示し下さっているわけがありますから、まず「信巻」を著していかれるお心を記しておられると領解されるわけでございます。そうしますと、「別序」の文で「信巻」を著されるお心を、次のように記しておられます。

ここに愚禿釈の親鸞、諸仏如来の真説に信順して、論家・釈家の宗義を披閱す。 (『真宗聖典』二一〇頁)

私が今、直接申し上げたいのはそこまでですが、最後まで読まさせていただきます。

広く三経の光沢を蒙りて、特に一心の華文を開く。しばらく疑問を至してついに明証を出だす。誠に仏恩の深重な

るを念じて、人倫の呾言を恥じず。淨邦を欣う徒衆、穢域を厭う庶類、取捨を加うといえども、毀謗を生ずることなかれ、と。

(『真宗聖典』二一〇頁)

もちろん「別序」の最初からでありますけど、今の発表内容に直接関係しまして、ここでは特に、「ここに愚禿釈の親鸞、諸仏如来の真説に信順して、論家・釈家の宗義を披闡す」というご文でございます。そうしますと、改めて言う必要もございませんけど、「信巻」は信を明らかになさっておられるわけですけれども、明らかになさるについて、親鸞聖人が法然上人を通して出遇われた念仏の教えがひとたび課題となることを通して、その課題を抱えた親鸞が、まず「諸仏如来の真説に信順」する。「諸仏如来の真説に信順」ということは、諸仏如来の真説を信じて、その心聞き取っていかれたわけでしょう。そのことを通して、その課題を抱えた親鸞が、その課題の開けへの方向を、そこからいただいでいかれたということでありましょう。

そうしますと、その「諸仏如来の真説」というのは何か。これも金子先生のご指摘でございますけど、それは「信巻」に引用される『大無量寿経』の因位の本願文、次の『如来会』の因位の本願文、それから正依の本願成就文と、その次の『如来会』の成就文等の文であります。

至心信楽の本願の文、

『大経』に言わく、設い我仏を得たらんに、十方の衆生、心を至し信楽して我が国に生まれんと欲うて、乃至十念せん。もし生まれざれば正覚を取らじと。ただ五逆と誹謗正法とを除く、と。已上

『無量寿如来会』に言わく、もし我無上覚を証得せん時、余仏の刹の中のもろもろの有情類、我が名を聞き已りて、所有の善根心に回向せしむ。我が国に生まれんと願じて、乃至十念せん。もし生まれずは菩提を取らじと。

ただ無間悪業を造り、正法およびもろの聖人を誹謗せんをば除く、と。已上

本願成就の文、『経』に言わく、諸有衆生、その名号を聞きて、信心歓喜せんこと、乃至一念せん。至心に回向せしめたまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得、不退転に住せん。ただ五逆と誹謗正法とをば除く、と。已上

『無量寿如来会』に言わく、他方仏国の所有の有情、無量寿如来の名号を聞きて、よく一念淨信を発して歓喜せしめ、所有の善根回向したまえるを愛樂して、無量寿国に生まれんと願せば、願に随いてみな生まれ、不退転乃至無上正等菩提を得んと。五無間・誹謗正法および謗聖者を除く、と。已上
(『真宗聖典』二二二頁)

特にこの四文を、私は「諸仏如来の真説」といたしたいわけです。ですから、本願文と成就文でございましょう。それを繰り返し繰り返し繰り返したまえられることを通して、願心を聞き取っていかれたと申し上げてよいのではないのでしょうか。

読んでまいりますとわかりますけれども、四文ともにしつこく唯除の文が出てきます。短い引用のなかに四回も、ちょっと鬱陶しいぐらい出てくるわけです。因願文にも成就文にも「唯除」が説かれていますから、四回も短い間に出てくるということは非常にしつこいなあと、こう思うわけでございますが、それが信順の姿だろうと。そのことを通して願心を聞き抜いていかれたということがあるのだと思います。

そして続いて、「別序」にございますのが、「論家釈家」です。「論家」は曇鸞大師、「釈家」は善導大師でございましょう。このお二方が、親鸞と同じくひとたびの出会いをさらに問うていかれた。出会いが課題となることを通して、さらに尋ねていかれたお二方でございましょう。そのお二方、曇鸞大師と善導大師の文を『大経』の文に続いて親鸞聖人が引いていかれます。「信巻」というのは、そういうかたちを通して、信を明らかになさっておられるわけです。念仏が

課題となることを通して、今一度信を明瞭になさっていかれた。どうかたちで明瞭になさっていかれたのかと言え、一般的に言えば、浄土仏教をまさに本願の仏教として明瞭になさっていかれた。一般的な表現ではそうなるかと思うのですけれども、もう一つ私なりに確認をすれば、まさに本願を本願として明らかになさっていかれた。本願に対する了解に曖昧さが残っておったんだろうと思います。ですから、信順された『大経』においては「唯除」を含んだかたちで徹底して本願を学び抜いていかれた。

そして、曇鸞大師の讃嘆門の文によりまして、問いが確認されています。

しかるに称名憶念あれども、無明なお存して所願を満てざるはいかん

（『真宗聖典』二一三頁）

ここで、御名を称え、本願を憶念なさっておられるわけです。しかし、その問を通して、曇鸞大師は、如来について実相身と為物身という確認をなさっておられるわけです。そうしますと、そこに表されておりますことは、本願というのだけでも、問い返されることを通して、今一度、実相身にえらぶ為物身として、明瞭に本願を徹底していかれた。ですから、曇鸞大師になりますと、たとえば、後に出てまいりますけれども、

不虚作住地功德は、けだしこれ阿弥陀如来の本願力なり。…中略…言うところの不虚作住持は、本法藏菩薩の四十八願と、今日阿弥陀如来の自在神力とに依る。願もって力を成ず、力もって願に就く。願、徒然ならず、力、虚設ならず。力・願相符うて畢竟して差わず。かるがゆえに成就と曰う。

（『真宗聖典』一九八―一九九頁）

このように「本願力」について「大願業力」と「自在神力」に分けていかれますが、このことも私は、本願というこ

とを明瞭になさっていかれたことだろうと了解をいたしておるわけでございます。その辺りが、私たちにおきまして、非常に曖昧さを孕むわけです。それを敢えて、曇鸞大師は、「実相身」に対する「為物身」という造語までされて、本願としての如来というものを押さえていかざるを得なかった。本願を本願として明瞭にしていかれた。そして、さらに阿彌陀の本願力について、「大願業力」と「自在神力」というかたちで、本当に衆生を救う如来の願心とは何かということ、徹底して明瞭になさっていかれた。そういうことであると、私は了解をしているわけでございます。

そうしますと、「信巻」というのは、信を明らかになさっていかれるについて、ひとたびの出会いが問われることによつて、まさに、浄土仏教を本願の仏教として明らかになさっていかれた。そしてその本願の仏教として明らかになさいていかれたということは、当然、本願をいただくということ、すなわち信が根本だということを明瞭になさっていかれた。こう申し上げてよろしいかと思えます。そのことは、「行巻」以降全部に、標拳に願名が挙げられ、そして冒頭に願文が挙げられるというかたちで、本願の仏教として、浄土仏教を明らかになさって下さっておりますのが、『教行信証』でございます。ですから、当然「信巻」というのは、『教行信証』全体の基盤となる巻だという意味を自ずから持つてくと申し上げてよろしいわけでしょう。本願によつて全体を基礎付けて、浄土仏教を明らかにして下さっておるのが『教行信証』ですから、その本願を明らかになさって下さった「信巻」というものが、『教行信証』全体の基盤という位置にあることは、当然のことであると申し上げることができると思うのでございます。

そのことの意味を、『六要鈔』で、「信巻」になぜ別序があるのかということにつきまして、

是れ安心の巻、要須為るが故に、此の別序有り。(『真宗聖教全書 二宗祖部』二七四頁)

と、「信巻」が『教行信証』の眼目だからであるとの指摘がありますが、その指摘にそのようなお心をいただくことでご

ざいます。そういうことで、「信卷」は、親鸞聖人ご自身が抱えられた課題を通して、まさに浄土仏教を本願の仏教として明らかになさっていかれた悪戦苦闘が背景となっている巻であり、『教行信証』全体の基盤となっている巻だというふうに、全体の中で位置付けることができるだろうと、了解をいたしておるわけでございます。

*

そして、次の「証卷」は、金子先生のお言葉をお借りすれば、「行卷」に心証されておる証ですね。往相の証果と、そして同時に利益としての還相利他です。その果というものを明らかにお示し下さっておりますのが「証卷」だということに、とりあえずは収めておきたいというふうに思うわけでございます。行において証しされる事柄ですね。あるいは「信卷」をくぐったところで言えば、行信において証しされる果ですね。それを往相の証果と還相の利益というかたちで明瞭になさっておつて下さるのが「証卷」だということでございます。

*

今回特に、私が、一つのポイントとして申し上げさせていただき、またお考えをお聞かせいただきたいと思っております。その後の「真仏土巻」と「化身土巻」を、全体の中でどういう巻としていただければよいのだろうかと、それが今日発表させていただきます大事な点と申しますか、主な点でございます。また後ほど、いろいろとお考えをお聞かせいただければと思うわけでございます。

私には、金子先生の二部作というところから与えられました視点があるわけでございます。「教」「行」「信」「証」の四巻と「真仏土」「化身土」の二巻とを、二部作としていただくという、金子先生のご指摘でございます。金子先生もそのようなニュアンスのことを仰っていますけれども、私なりに申し上げます、「教」「行」「信」「証」は一

人一人において行証されていく内容です。「教」「行」「信」「証」は一人一人において行証されていく。それに対しまして「真仏土」「化身土」というのは、そうではないわけです。これも金子先生からヒントをいただいたと申しますか、むしろ、私が勝手に言ったほうがよろしいかと思いますが、金子先生が一言そういうふうなことを仰っておられたという意味で、ヒントなのですから、私は、その二つの巻をどう読むかということについて、「真仏の土」と「化身の土」と読みたいということがあるわけです。もちろん「真仏真土」「化身化土」と親鸞聖人はお示しなのですけれど、全体として、私は「真仏の土」と「化身の土」といたきたいわけです。

そういう意味で、前四巻が行証されていく世界であるとしませうなら、後の二巻は文字通り「世界」です。真仏の世界、化身の世界です。自ずからそこに、前四巻と後二巻は、性格を異にしているというふうな受け止めることができると思われたいです。行証される世界と、いわゆる世界ですね。そうしますと、その「真仏土巻」と「化身土巻」をどういたしたいのかということにつきまして、これも金子大栄先生のご指摘でございますけれど、このようにお示し下さっております。

「真仏土巻」は能機の法である教・行・信・証に対して、所機の真土を顕すものであるという古来の説は、否認することのできないものではあるが、それよりは方便化身土の意義を顕す前提と見る方が適切なのではないであろうか。

（「金子大栄著作集 第十二巻」一四頁）

このように、中心は「化身土巻」にあるのだと。「化身土巻」を著す前提として、「真仏土巻」があるのだと。これは金子先生にご指摘をいただかないとなかなか、そういう眼というものは、私自身は開かれませんか。そうかと言って、必ずしも金子先生のご了解を正しく受け止めておられるわけではありませぬし、私なりの了解に入っていくわけでありませぬ。

私たちは、どうしても「真仏土」「化身土」と申しますと、「真仏土」に比重を置くわけです。すると、金子先生が仰っておられる「化身土巻」の前提としての「真仏土巻」ということは一体、どういふことなのだろうか。

そのことを申し上げさせていただきます前提として、二点ばかり申し上げさせていたいただきたいと思うわけであり、浄土真宗でございますから、浄土、真仏土が大事だということは当然のことなわけですけれども、しかし親鸞聖人においては、浄土を積極的にかような世界だとかたぢで浄土という世界はこういふ世界だということ、もろろん全くではございませんけれども、表してはおられない。「入出二門偈頌」とか、そういうところには、お書き下さっているわけですが、特に、『浄土文類聚鈔』におきましては、「真仏土巻」「化身土巻」はございませぬし、そしてあと親鸞聖人が著された著述でも積極的には表しておられない。そしてこのことは、『歎異抄』も「往生をとげる」等の表現はありますが、浄土の世界がどういふ世界かということについては、全くといっていいほど表しておられないのではないのでしょうか。それは大事なことはないかと思うのです。それに対して浄土をあらわしておりますのは、『御文』ではないでしょうか。

永生の楽果

(『真宗聖典』七七頁)

とか、あのような、非常に印象に残るかたちで表しておられるのが『御文』です。私は、その辺が、『御文』と『歎異抄』の一つの違いであり、また『御文』が、非常に人々に受け入れられ、『歎異抄』があまり受け入れられていかなない要因の一つではないかと思うのです。しかし私は、『歎異抄』が浄土を表していないということは、親鸞聖人のお心にならなっていると、こう了解をいたしておるわけです。それがどういふことかにつきましては、今日は申し上げるのは控えさせて

いただきたいと思えます。

ともかく、私どもは『教行信証』で考えますと、どうしても、「化身土巻」に対して「真仏土巻」に比重を置くわけです。「真仏土巻」を「化身土巻」の前提というよりも、「真仏土巻」を非常に大事な巻として思うわけです。それに対して、そうではないという金子先生のご指摘は、私は非常に大事なご指摘ではないかと受け止めているわけでございます。それが一つでございます。

もう一点は、「証巻」と「真仏土巻」との関係です。「証巻」と「真仏土巻」との関係は、決して別のものではないわけでありましょう。二つの巻に引かれております引文をいただけは、別のものと言うことはできないわけでしょう。それではその関係は何かということですが、私は、「証巻」は文字通り念仏に生きる人の上に開かれる世界を直接的、端的に表したものである。確かめたり考えたりしてではなくして、端的に表している。そういうふうに「証巻」を了解したいのです。ですから、証の内容をお示し下さっておりますところは非常に短いのです。そしてその発端の詞と書かれております「証巻」の冒頭は、「謹んで顕さば」です。「案ずる」ではなく、「顕す」です。その辺に証果ということとを端的に表す、そういうお心が表れていると見てよいのではないのでしょうか。ですから私は、「証巻」は念仏者の上に開かれる世界を端的に表現なさっている。それで「謹んで顕さば」と、こう申し上げることができるのではないかと思えます。

それに対して「真仏土巻」は何かと言えば、「謹んで案ずれば」です。だから端的ではないわけです。念仏者が出会い、念仏者の上に開かれる世界を、よくよく案じて著していかれた巻が「真仏土巻」です。ですから、「謹んで顕す」に対して「謹んで案ずれば」です。私は、「証巻」と「真仏土巻」について、このように押さえることができるだろうと思います。すなわち、「証巻」は念仏者の側から端的に著されている。それに対して「真仏土巻」は、開かれた世界を世界として案じて著していかれた。こう申し上げることができるのではないかと。ですから、「真仏土巻」は「謹んで案ず

れば」ですし、「証巻」は「謹んで顕さば」でございます。そうしますと、なぜ「謹んで案」じて浄土を表す必要があったのかということについてですが、それは、金子先生が教えて下さっていますように、「化身土巻」を著すためだということになります。では、なぜ「化身土巻」を著すために「真仏土巻」を著す必要があったのか。それは当然、「真仏土」は前提なので、「真仏土」を著さなくては「化身土」を著せないということです。

*

そのことについて申し上げます前に、「化身土巻」とはどういう巻かということ、まず申し上げます。ただ、「化身土巻」とは、この現実世界を二尊教化の世界として明らかにして下さっている巻だと申し上げることができると思います。弥陀・釈迦二尊教化の世界。この現実世界は穢土でありますと同時に、弥陀・釈迦二尊の教化の場、教化の世界になります。そういうこととして明らかにして下さるのが「化身土巻」の本・末二巻と、私はいただくわけでございます。ですから、そこには当然、先輩方のご指摘のように、「信巻」との関係があるわけがあります。

そして、そこには、親鸞ご自身が生涯課題にし続けていかれた疑い、自力の執心の問題、それから、身を置いていかれた現実、そういうものが「化身土巻」開頭の背景にはあるわけでありましょう。そして、そのような現実を包むかたちで、初めて仏教の世界というものを明瞭になさって下さった、それが「化身土巻」でありましょう。ですから、いわば結果がないわけです。宗教に壁がないのです。現実世界を真宗の世界として、「化身土」として初めて明らかになさって下さった。穢土だとして、単に切り捨てるわけではなくして、その穢土が、そのまま二尊大悲教化の世界としての意義があるのだと明らかに示しておて下さるのが、「化身土巻」であると了解をするわけです。そうしますと、そのことによって、現実を二尊教化の世界として明らかにしていく上で「真仏土」が必要になるわけでありましょう。「真仏土」がなければ、この現実の世界を「化身土」としては了解できないわけでしょう。説明はできませんけれども、しかしこの

現実をまさに二尊教化の世界として、受け止めていくことができるのは「真仏土」に照らされているからでありましょう。それを前提としてでありましょう。少なくとも、「真仏土」がなければ、この現実の世界を「化身土」として著すことができないと思います。そのことを抜きにすれば、単に現実が化身土であるという説明だけになってしまうのです。ですから「真仏土」に照らされることにおいて初めて、この現実を「化身土」として著すことができる。ということは、自ずからそのような世界として、受け止めていくことができる。そういうこととして、金子先生の、「真仏土巻」はむしろ「化身土巻」の前提だというお示しを私なりにいただきまして、「真仏土巻」を前提とすることによって、現実を二尊教化の世界として、自ずから明らかにしていくことができると、あるいは『教行信証』で言えば、書き著すことができる、こう申し上げてよろしいのではないのでしょうか。その辺りのことにつきましては、後ほど皆様方のお考え等をお聞かせいただければ有り難く思うわけでございます。

*

私なりに『教行信証』六巻の位置と申しますか意義、全体の中での六巻の持つておる内容、意味内容を、以上のように了解をいたしておるようなこととでございます。

最後に、最初に申しました、「教」が詮わすもの、能詮であり、それから、「行」「信」「証」「真仏土」「化身土」が所詮ということでありますけれど、当然これは『大無量寿経』をただだけば、末尾には「化身土巻」に相当する箇所がありますし、構造上、『大無量寿経』にはその全体が含まれているということは、了解ができるわけでありまして、ただししかしそこに、能詮ということはどういうことかというのを、確かめさせていただきたいわけでありまして。

こういうことも、曾我先生がご指摘下さらないと、なかなか気づけないことでもありますけれども、当然、『大経』があって真宗の現実が生まれたわけではないわけです。言葉が現実を生み出すということは、ないことはありませんけれど、

しかし生み出すには、その言葉の前提となる現実があるから、その現実が改めて生み出されていくわけです。ですから、『大経』が真宗を生み出すことはできないわけであって、当然、『大経』に先だって、「行」「信」「証」「真仏土」「化身土」という、真宗が生きられているということがあるわけです。そのことにおいて、『大経』がそこから生まれてくるわけでありましょう。お釈迦様が説かれたから、いきなりそれが現れるというわけではありません。説いたことがもし生み出すとすれば、すでにそのことが、現実にはたらいとおったから生み出されたのであります。そのことは曾我先生の『親鸞の仏教史観』の言葉でありますけど、次のようにあります。

何故『大無量寿経』が真実の教であるのかと云へば、浄土真宗を開顕して居るからである。浄土真宗の道を開顕した、浄土真宗と云ふ一つの道の歴史、道自体の展開の歴史、其道の歴史の中にあつて道の歴史を明かにして居る。故に既に『大無量寿経』と云ふお経が先づ成立してそれから『大無量寿経』の歴史が始まつたのでなうて、『大無量寿経』と云ふものは既に道の歴史の中にあゝ云ふ経が出来たのである。

（『曾我量深選集 第五卷』四二二頁）

ですから、真宗がすでに、現実の中に生きられておって、そしてその生きられておった真宗が『大経』を生み出したのだと。そして『大経』が生まれることによって、いよいよ真宗は明瞭になっていき、さらに広く伝播していくという事態がそこに起こってまいるわけでありましょう。ですから『大無量寿経』は、単にお釈迦様が説かれた経典ではなくして、すでに『大無量寿経』に説かれている内容は、現にそのことが生きられ、行じられている世界があったのだと。その生きられておる世界を、むしろ申しますならば、釈迦の名において表現された、言いたいのであります。釈迦の名において表現されたことを、お釈迦様が説かれたとされていると申してよろしいのでしょうか。『大無量寿経』は、単に、個人釈迦が説いた経典ではないわけです。その生きられている世界が釈尊の名において表現された。ですからその

生きられておる世界が、むしろ『大経』というすがたを、釈迦の名においてとっていったのでしよう。そのことを、先ほど申しました、別序で、親鸞聖人が『大無量寿経』を「諸仏如来の真説」と押さえておられるところにいたいただくわけです。そのことが、単に如来の真説でもございませんし、釈迦の真説でもなくして、「諸仏如来の真説」と記されているゆえんじゃないでしょうか。「信巻」の本願文、成就文は「諸仏如来の真説」ですから、これは無数の人々において生きられてきた、それが言葉となっておるのだということが「諸仏如来」という言葉で表しておられるお心でございます。そして、さらにもう一つ、これは『一念多念文意』でございますけど、こういうふうに仰っています。

『大経』には、「如来所以興出於世 欲拯群萌惠以真実之利」とのべたまえり。この文のころは、「如来」ともいうすは、諸仏をもうすなり。

（『真宗聖典』五四二頁）

「如来世に興出したまう所以は」という、この「如来」は諸仏であり、諸仏を如来と言うのだと。「教巻」では、この「如来」は「釈迦」と限定しておられるわけです。親鸞聖人は、「教巻」では、明瞭に二尊教ということをお示し下さるという意味で、「釈迦、世に興出したまう所以は」と、「弥陀」に対比させて押さえておられます。「教巻」では二尊教ということ明瞭になさるというお心があるわけでありましょう。しかしこの『一念多念文意』におきましては、「如来」ともいうすは、諸仏をもうすなり」と。これは無量無数の方々において生きられ行じられてきた世界が、『大経』として説かれているのだと。それが親鸞聖人の『大経』観だと、こう申し上げてよいのではないのでしょうか。単に釈迦個人の説いたものではなくして、『大経』に説かれている言葉で言えば、「群萌」、「群生」の中に行証されてきた世界が『大経』だと。そういう『大経』観が、親鸞聖人においては「諸仏如来の真説」、あるいは「如来」ともいうすは、諸仏をもうすなり」という押さえになっておると受け止めることができるだろうと思うわけがあります。

そしてそのことは、もう一つ申し上げさせていただけば、『大経』の世界は、そういうように生きられてきた人々の中で学ぶ、そのことを抜きには学べないのではないか。そういうことが一つあると申し上げてよいのではないのでしょうか。単に個人の説ではございませんから。そこには、『大経』を生きてこられた方々が、一つの経典として『大経』という方々たちをとっているわけです。その意味におきまして、その方々を抜きにして『大経』は、真宗の世界は学べないわけでしょう。そういう意味も、この親鸞聖人の『大経』観から、学び取ることができるだろうと思うわけでございますし、またそのことが『教行信証』全体の世界、『教行信証』が私たちに示して下さっている大事な点だと申し上げてよろしいのではないかと思うわけです。

*

以上、各巻の位置と申しますか意義・内容につきまして、私なりの了解を申し上げさせてきたわけですが、そのことから一体何を、どういうことが教えられているのかということをもとめて申し上げさせていただけば、『教行信証』が教示して下さることは、五濁の世を場として、僧伽に身を置いて学ばれ行証されていく仏教が真宗だと、このように申し上げることができないのでしょうか。五濁の世を場として僧伽に身を置き、念仏申していく、行証していく、それが真宗だと。

その、私の拙い表現を、補強という用語弊がありますけど、曾我先生のお言葉で結ばせていただきたいと思えます。これも『親鸞の仏教史観』の言葉でございます。曾我先生が『教行信証』の仏道とは何かということをお示し下さっております。拝読させていただきます。

吾々の真の仏道の自覚は念仏の歴史の中にあつて、而も此事業に参加して行くことであるが、歴史の中にあるもの

のみが本当に歴史に参加し得る、かう云ふことが親鸞の歴史観、即ち親鸞の『教行信証』の安心である。詰り象徴莊嚴成就の南無阿弥陀仏の中に純一無雜の願心の南無阿弥陀仏を見出して来た。南無阿弥陀仏の法の歴史の中に於て、南無阿弥陀仏の超歴史的自己の安心を見出した。惟ふに念仏を正信すると云ふことは念仏伝統の歴史より生れて、念仏の世界に於て、念仏の歴史を超えて、却つて念仏の歴史を作り、念仏の歴史の不滅の法燈を証明する事業であります。

(『曾我量深選集 第五卷』四七〇頁)

これが『教行信証』の安心だと。ここには「五濁の世」というお言葉はございませんけれども、当然そのことは前提でございます。南無阿弥陀仏、僧伽の歴史の中に身を置いて、歴史を貫いておる、歴史を超えておる真実を見出し、そして、その歴史を証明し相統していくのだと、それが『教行信証』全体を貫いている仏道の意志と申し上げてよろしいかと思うわけでございます。

私の発表はこれで終わらせていただきたいと思います。